

## 弥生さんの高知への思い

伊東 喜代子

弥生さんが初めて高知に来られたのは、大正15年の夏休みで女学校1年生の時でした。祖母亀さんの埋骨の為に、寅彦先生が4人の子供（東一・正二・弥生・雪子）さん達を連れて、7月28日に東京を出発し高知へ来ることが初旅となりました。列車と汽船を乗り継ぎ棧橋に着くと20人程が出迎え、15・6台の人力車で寺田家の墓地に向かいました。この時初めて実母であるお母さん（寛子）のお墓参りをしたそうです。その後朝倉の伯母様の家で11日間過ごされています。祖母の亀さんからはいつもお国の話を良く聞かされていましたが、お国とはどんな所か全然判らず楽しみにしていたそうです。しかし、船酔いに襲われ吐き気で眠る事もできず、伯母さんのお宅での皿鉢料理など沢山の御馳走にも箸がつけられなかったようです。次の日からは、伯母さまのお孫さん達と種崎の海辺で小石を拾ったり、宇佐の海岸や仁淀川それから横浪三里に行き川遊びや海での遊びを楽しんでいます。仁淀川を見た時は「今迄見た川の中で一番水が澄んでいて、所々で子供達の泳ぐ姿を見た。」と書かれています。現在でも四万十川より仁淀川の方が澄んでいて、魚が多く泳いでいる姿を良く見ることができ、全国からキャンプや釣りで自然を満喫しに来られる方が多い清流となっています。寺田先生が潮の潮汐観測をした思い出のある場所でもあることから、きっと海岸へ子供達を連れて行ったのかなと思った事でした。

私が弥生様にお会い出来たのは平成4年8月（当時80歳）高知に寺田先生の遺品資料が寄贈された時が初めてで、その後文学館が開館した平成9年11月に再会することができました。其の時は杖をつかれていましたがとても上品でお綺麗で色白でとても優しいお方だと思いました。

文学館では、寺田先生の猫を使った実験を手伝った時、縞模様を紙に写し取る作業では動き回る猫と格闘した事などを話され、懐かしく思い出され感慨無量だったようです。弥生さんは、「父はいろいろ変わった実験もしましたけれども単なる思い付きでなく、この研究も分厚い細胞学の本を四冊勉強してやったようです。」と父寅彦先生を語っ



写真：寺田寅彦記念館に贈られた弥生さんの作品  
（ポシェット3品）（筆者撮影）

ています。今迄に6回程高知に来られて必ずお墓と記念館には立ち寄られ、いつも3日間

位は滞在されていたようです。

平成5年2月にはご子息の関直彦様が著書「父 寺田寅彦」で第12回「寺田寅彦賞」を受賞されたことで来高、その際「弥生さんが高知との縁の切れる事を大変心配していません。絆を切らさぬようにと特にその事を言っていました。」と話されています。

そのこともあってでしょうか弥生様からは、旧邸記念館に寅彦先生の洋行カバンや平成12年には<sup>オオサカズキ</sup>大杯の楓5本を寄贈して頂きました。そのことにより高知の旧邸は当事を甦らせており弥生様の高知への思いが伝わっています。今まで数多くの遺品を高知に送っていただいております、これらの品々をこれからも大切に守って参りたく思っています。



左写真：弥生さんが寺田寅彦記念館に贈って下さった楓（大杯）

昔、弥生さんの祖父寺田利正氏が東京から苗木を取り寄せ、庭にはたくさんの楓が植えられていたという。それが戦災後なくなっていた。それを寂しく思った弥生さんが、昔、庭にあった楓と同じ種類の「大杯」5本を贈ってくださった。平成12年のことである。それから13年が経ち、今では大きな木となり、庭の大切な景色をつくっている。（写真は筆者撮影）

右写真：弥生さんが寺田寅彦記念館に贈って下さった寅彦先生のトランク

日本から船に乗って、寅彦先生と共にはるか遠地ヨーロッパへ旅をしたトランクには風格がある。表面に貼られたステッカーにも注目したい。（写真は筆者撮影）

